

P・フルキエ著「公民の倫理—入門哲学講義—」筑摩書房 1977年9月25日刊を読む

II 訓育

1. 語源から出発して

- (1) 《訓育》というフランス語の名詞は、ラテン語の動詞の *educare* (*ducere*[導く]+[の外に]) という意味の接頭辞 *e*) から派生した語である。語源的には、訓育するという語は、「……から外に出させる」と言いかえられる。この表現は、二、三の異なった解釈を受け入れる。
- (2) まず訓育の役割として、子供が生まれた時の状態——要するに動物的状态——から外に出させて、よりよい状態に子供を導くということがあり得る。生まれたばかりの嬰兒の行動と、同じ年齢の動物の行動との間に、本質的には違いはない。しかし何年か後に両者を比較すれば、子供の方がはるかにすぐれたものになっているだろう。この優越性は主に訓育による。放っておかれれば、子供はいつまでも、動物の水準のままにいることになるのは、動物の社会の中で成長した子供についての観察記が示している通りである。
- (3) 次に、訓育を、子供のうちに隠され、埋もれていた富を、外に出させる(とり出す)技術と考えることも出来る。実際、教えることと訓育への心遣いが、すべてをなすものではない。訓育の利益を得る存在は、訓育され得る者でなければならない。子供と一緒に猿を訓育しようとした人があった。初めの何年かは、猿は人間の子供に優っていた。すでに、猿は肉体的に完全に発達していたので、人間の子供よりも四肢を自由にあやつり、しかも器用であった。しかし六、七年たつと、子供は猿よりも優るようになり、無限に進歩するようになる一方、猿は停滞してしまう。子供のこの優越性は何によるものなのだろうか。それは、かなり後になってはじめて現われる能力によるもので、その展開は、子供の受ける配慮による。
- (4) 最後に、訓育するとは、自分から外に出させ、他の人に注意するようになることでもある。子供が自然の傾向にまかされると(おとなもそうだが)、自分のこと、自分の快樂、満足、利益しか考えなくなる。子供はエゴイストで、まさにそのことによって、非社会的である。人を社会化することは、何よりも、他人についての感覚を教えることである。日常の関係では、この感覚は特に礼儀にあらわれるのであるが、礼儀こそ訓育の主な要素の一つなのだ。無作法な人のことを、世間では、育ちがわるいとか、教育が欠けているとか言わないだろうか。

2. 定義

- (1) 訓育は、「人間の発達を確実にするのに適した手段を発動させること、」と定義されよう。また訓育という語は、この手段が効果があったときに、この手段の使用によって得られた結果の意味にもなる。「人は、よく訓育されたとき、教育(教養)がある *avoir de l'education* という」のである。
- (2) 人をよりよく発達させるために用いられる手段は多い。よい訓育は、多くの条件に左右される。衛生、健康で十分な栄養、十分な睡眠、年齢に適した遊びと勉強、のような肉体的次元のものがある。また子供が、家庭や学校で愛情に包まれること、子供が両親に対して尊敬の念を抱くこと、両親や教師達が子供に対して権威をもっていること等、精神的次元のものもある。

- (3) これらの手段は、教育者、特に子供の自然の教育者である両親によって用いられる。家庭教育の最も有効な要素は、実例である。子供は、彼の生活している環境で、教育者達を自然に模倣し、彼らのように語り、彼らの思想、感情を採り入れ、彼らの身ぶりをまねる。次に教育者達は、どのように行動すべきかを特に教え、子供が過ちをおかすと厳しくしつけ、子供が悪い傾向に屈する弱さを示す時には罰することもある。このようにして一生もち続けられる習慣が、少しずつ得られることになる。
- (4) 環境の影響にも注意するのがよい。級友というものは、考えもせず、特に感じられもしないが、殆ど間違いなく、そのグループに加わる者を同化する、即ち、その子に自分達の考え方、感情、語彙、身ぶりをとり入れるようにさせて、自分達に似たものにする。それ故、子供の出入りする社会環境の選択が最も重要になる。
- (5) 経済学と同様、教育学にも見えるものと見えないものがあり、通常、見えないものは見えるものよりはるかに重要である。見えるものとは、学校と家族の作用である。見えないものとは、子供をいたる所で包む影響力の網子供の目の前の実例、子供の聞く言葉、子供が見ぬく感情、子供の浸っている風習、子供の身につける習慣である。(L・デュガ「フランスの教育学」『教育学雑誌』1925年所収論文)
- (6) さらに、最初の訓育のおとなの介入を必要とするとしても、一度分別のつく年齢に達すると、子供は自分自身の訓育で勉強が出来るようになる。まず、教育者が勧める実践に従い、次に自ら進んで自分を発達させるに相当と思う訓練を受けることによって。この発達は、一生を通じて続けられる。自己の尊厳を意識した人は、死ぬまで、一層人間らしくなろうとするだろう。
3. (1) 訓育の目的は人間の発達、肉体的、精神的、全人的な調和のとれた成長を確実にすることである。訓育の様々の領域を次に分類してみよう。
- (2) 人にはまず身体があり、身体がすべての活動を条件づける。農夫や労働者の肉体的な活動ばかりでなく、生徒や技師の精神的活動、病人を看病する修道女の倫理的活動などがあるが、身体の状態のために、生徒としての義務の果せない子供のいることはかなり知られているし、病気は人をわがままにしたり、気むずかしくしたりする。それ故、完全な訓育には体育が含まれるが、その目的は、均衡のとれた身体の発達、特に身体に対する精神の統御を確実にすることである。
- (3) 実際、体育そのものは身体の調和ある発達を最終目的とするものではない。体育は人間を作るべきもので、私達を人間にするものは、私達の精神、あるいはむしろ精神以上の能力、主として知性、意志であり、身体はその道具なのである。
- (4) 知性、即ち理解し、説明する能力を発達させる方法の総体は知育とよばれる。この面の訓育は、主に学校で行われる。
- (5) 実際、学校で学ばれる歴史は、革命や戦争のような事実を述べるだけではなく、その原因を示し、そのことによって事実を説明する。地理は地球の単なる記述ではなく、どのようにして地球が、現在の姿をとるようになったかを示そうとする。物理では、何故モーターが回転し、どのようにして雨や雹(ひょう)がつくられるかを学ぶ。フランス語の授業は、我々の国語を一層よく知ることによって他人の考えを一層よく理解し、自分の考えを一層よく説明することを教える……。多くの訓練で精神を柔軟にすることによって、精神は物事や人を速く理

解出来るようになる。知性とよばれるこの理解の速さは、学校で受けられる訓練の最も貴重な結果である。

しかしながら訓育を語る際に特に注意されるのは、人間において、義務の遂行を制約する能力——感性と意志——の発達と目的とする道德教育である。義務を果すためには、義務を果すことを愛し、欲しなければならない。

義務は愛さなければならない。人は、無関心であるか嫌悪しか感じない原因に、長いこと献身的になることはできないからである。

(6) 自らをよくしようという欲求に基づかないで、自らをよくしようと決意するということは殆どあてにならない。息の長い仕事やいやいやなそうとしたり、実現しようとしていることを愛していなければ、自ら成功の機会を捨てることになる。成功するためには、仕事への愛がなければならないのだ。(『意志の教育』)

(7) それ故、子供を教育するためには、理想の生き方や美德を、それらが得させてくれる幸福、またそれらが作り出した心引かれる典型を子供に示して、それらを愛すべきものにしようとする。

(8) しかし、意志も必要である。義務への愛は、低い次元での執着のすべてを抑えることはしない。それ故、教育者の基本的な関心事は、意志の形成である。

(9) この形成の最初の段階はしつけであるが、これはしつけを行うのにさからう障害を少なくするものだ。教育者としての自分の仕事を心得ている母親は、赤ん坊の気まぐれに負けず、子供には理解されない理由は、求められてもあまり教えようとはせず、態度、秩序、礼儀の一定の習慣を押しつけるのである。

(10) 知性が目覚めた後での第二段階では、教育者は、理性に訴える。教育者は子供に押しつけた規則の理由を示し、それをおかすことが惹きおこす混乱を感じさせ、その規則が尊重すべきものだとして自分で判断するから、その規則を守るのだ、と子供に教えるのである。子供が規則を破った場合は、子供に、その悪いことを一層はっきりと意識させるために、身にしみるような罰を課することもあり得る。

(11) 更に第三段階では、もう体刑に頼ることはなくなる。未成年者、青年の無軌道な行動への非難、両親を苦しめたという感情こそが唯一の罰であろう。

いま、あなたがどの段階にいるかは、あなた自身の問題である。

(12) 道德教育には礼儀が関係がある。普通の用法で、教育という語で一番多くいわれるのは礼儀ということである。《教育がない》ということは、礼儀知らずであるということだ。社会生活では礼儀は重要なので、この問題は後にもっとくわしく述べることにしよう。ここではただ、慣習的な規則を守るというだけの通俗的な礼儀というものがあるとすれば、真の礼儀は美德であるということを注意しておこう。礼儀は思いやりの微妙な形式であり、完全であるためには、習慣的な自己制御と、自分の気まますを棄て去ることを必要とする。